

國學院大學學術情報リポジトリ

柄鏡形住居研究の論点と課題整理

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 康浩, Taniguchi, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000422

柄鏡形住居研究の論点と課題整理

谷口康浩

I 特集号へのプロローグ

縄文時代中期末から後期中葉にかけて、関東地方西部から甲信地方を中心とする地域に、出入口に細長い通路が取りつけられた柄鏡形住居が発達した。柄鏡の持ち手のように飛び出た細長い出入口に最も特徴がある独特な家屋形態である。この細長い出入口を「張出部」と称する⁽¹⁾。主体部の床面や炉の周囲、あるいは張出部に、平たい石を敷き並べた敷石住居が多いことも、柄鏡形住居の顕著な特徴となっている。細長い出入口も床面を覆う敷石も、縄文時代の竪穴住居にはほとんど見られない特殊な構造である。なぜこうした特異な家屋が突如現れたのか、真相は依然として不明であり、縄文時代集落研究の懸案の一つとなっている。

本特集号では、柄鏡形住居研究の課題整理をテーマに据え、五名の論者にそれぞれ異なった切り口からの論考を寄稿していただいた。冒頭の本稿では、柄鏡形住居の研究がいかなる意味で重要なかという点について編者の見通しを示した上で、研究課題の整理をおこなう。柄鏡形住居に関する研究史は、この分野の研究を牽引してきた山本暉久によって詳細な解題と整理がなされており(山本一九九九・二〇〇二・二〇〇四)、本特集でも山本が最近の研究動向

を解説している（山本二〇一七）。これまでの研究の推移と現状についてはそれに譲ることとし、ここでは中核的な論点とそれに関連する研究課題を整理してみたい。

柄鏡形住居の研究から提起されている問題は複雑であり、その歴史的性格を総合的に論じるには複眼的な視角からの検討が必要である。本稿では「地域史」「社会構造」「象徴性」の三つの視角から中核的な論点と課題を抽出し、本特集号へのプロローグとする。編者の問題関心に偏った課題整理となるが、研究の行方を展望する一助となれば幸いである。

II 地域史の論点

(一) 中期末の社会変動と柄鏡形住居

柄鏡形住居が出現した縄文時代中期末は、中部・関東地方一帯で集落遺跡群の動向に大きな変化が生じた時期である。集落遺跡群の様相に顕著な変化が認められるのは、現在の長野県・群馬県・山梨県・神奈川県・東京都・埼玉県にまたがる、関東地方西部および甲信地方である。

中期中葉から後葉にかけての約五〇〇年間は、中期縄文文化の最盛期といえる時代であった。中部・関東地方一帯で集落遺跡数と住居数が飛躍的に増加するとともに、圧倒的多数の遺構・遺物が集中する拠点的で長期継続的な環状集落がその数を著しく増やしたことは、該期の最も注目すべき現象である。地域人口の増大を伴った社会的・文化的な昂揚と活況がこうした遺跡群の動向の背景となっていたことは確実である。この時期はまた、勝坂式土器・焼町土器・火焰型土器・曾利古式などに見られるように、過剰ともいえる文様と造形をもつ個性的な土器群が発達し、各地

に割拠するように分布圏を形成した時期である。縄文土器の造形の歴史においても、それ以前の様相とはまったく異なる飛躍的な変化が記された時代であった。さらに、土偶や大形石棒などの宗教的遺物が増大した事実も注目され、精神文化の面にも昂揚が認められる。そうした中期縄文文化の発展の経済的基盤として農耕の存在を想定する学説もある（藤森一九七〇）。最近の植物考古学研究の進展は目覚ましく、中部地方におけるダイスやアズキの栽培化（中山二〇一〇、小畑二〇一六）やクリ林の管理（千野一九八三、鈴木二〇一六）の事実が把握されるに至り、中期に一定レベルの植物栽培技術が存在したことは否定しがたい状況となってきた。中期中葉から後葉にかけて発現したこれらの諸現象は、前期の海進期に関東平野で先行して開化した貝塚文化に対して、内陸高地性の縄文文化が発達安定し、一つのピークに達したことを示すものである。

ところが、中期末を迎えると、内陸地帯の中期縄文文化に陰りが現れてくる。関東地方西部・甲信地方における遺跡数と住居数は、加曾利E3式期を境に急激に減少した。中部・関東地方における縄文時代集落の動向を土器型式別の住居数の推移から分析した鈴木保彦によると、集成された竪穴住居跡九六一二棟のうち七一三七棟が中期のものであり、中期中葉勝坂2式期から中期後葉加曾利E3式期がその八〇%以上を占めている。一〇〇棟近くの多数の住居跡が累積した拠点的な集落遺跡も特徴的にみられ、鈴木はこの時期を縄文集落の全盛期と捉えている（鈴木一九八六）。しかし、中期末の加曾利E4式期になると、住居数が前時期（加曾利E3式期）の四分の一以下にまで急激に減少した。拠点的な環状集落で居住の継続性が失われる半面、小規模な集落への分散化が生じたのである。中期末・後期初頭における集落遺跡の急激な凋落は、中期縄文文化の繁栄が久しかった八ヶ岳西南麓でも顕著に現れている。同地域における集落遺跡群の動向を分析した勅使河原彰の集計によると、竪穴住居数がピークに達した曾利II式期に比べ中期末曾利V式期は約四〇%、後期初頭称名寺式期は一〇%未満にまで減少している（勅使河原二〇一六）。

一方、土器の造形も退嬰的なものとなり、活力にみちた中期中葉から後葉前半の土器群に比べると、いかにも拙速な作りのものに転化する。文化的な退嬰化は土偶にも現れている。中期縄文文化の発展を象徴する存在であった立像形土偶は、小型で抽象的なものに変化し、ついには土偶そのものが消失することとなった。⁽²⁾

柄鏡形住居が出現し、中部・関東地方一帯にその分布を拡張したのは、このような社会的・文化的な変動期であった。中期末に出来た地域文化の構造的変動と柄鏡形住居という特異な構造の家屋の成立との歴史的脈絡を説明すること、それが大きな研究目標である。その目標に接近するための基礎的課題として、柄鏡形住居の出現から終末にいたる変遷過程を時空間上に正しく位置づける作業がまず必要となる。この第一の視角をここでは地域史的な分析と表記しよう。

(二) 地域史的視点からみた諸問題

① 柄鏡形住居の起源・成立

柄鏡形住居の成立については、研究者間に見解の相違がある。山本暉久は中期中葉の一部の堅穴住居に見られる石柱・石壇を敷石風習の起源と考えるとともに、屋内埋甕に伴う出入口部分の小さな張出が拡大して細長い張出部が成立すると考察した。このような理解のもと、山本は出入口部に小張出を設けたいわゆる潮見台型住居(本橋一九八八)を柄鏡形住居の範疇に含めており、柄鏡形住居の変遷過程のⅠ期に位置づけている(山本二〇一〇)。本橋恵美子も同様の系統観を示し、出入口の小張出をもつ潮見台型住居と、埋甕に伴う配石遺構・敷石住居の要素が融合して、柄鏡形敷石住居が成立したと論じている(本橋一九九五)。

しかし、潮見台型住居など先行要素からの系譜を重視するこうした系統発生説には異論も提起されている。柄鏡形

敷石住居の出現期の事例を検討した石井寛は、加曾利E3式期に遡る群馬県北西部の諸例に、敷石や張出部の構造がすでに完成した形で見られることを明らかにした(石井一九九八)。張出部が初期の段階からすでに完成形をもって存在する事実は、変化が飛躍的なものであることを強く印象づけることとなった。一方、出現期の柄鏡形住居および同時期の竪穴住居を遺構属性の統計解析から検討した川島義一は、地域と遺跡によって住居属性の選択に多様性がある実態を明らかにしている(川島二〇一七a)。川島の考察によれば、柄鏡形住居は特定の起源地で成立した形態がそのまま周辺地域へと伝播波及したのではなく、それぞれの地域でおこなわれていた住居構造を継承しながら、それに張出部を付加する形で受容されたものであるという。

系統発生説の是非を論じるためには、最古段階の事例が分布する地域を特定し、張出部や敷石につながる要素が同地域の直前段階に実際にあるのかどうかを再検討する必要がある。遺構の考古年代を決定する土器型式編年の精度を上げるとともに、地域間の型式の併行関係を押さえた確固たる広域編年を整備することが前提的な課題となる。

② 柄鏡形住居の受容と波及

本特集掲載の論考で川島義一は、加曾利E3式期古段階から加曾利E4式新段階までを対象に、柄鏡形住居の成立から波及にいたる過程を時系列に沿って再検討している(川島二〇一七b)。長野県・群馬県方面で最初に出現した柄鏡形住居が、関東地方南西部の神奈川県、東京都、埼玉県方面へと分布を拡大していく様子が捉えられているが、興味深いのは各遺跡での受容の在り方によりかなり差があるとの指摘である。川島によれば、柄鏡形住居の伝播によって住居型式が一新されるのではなく、在来の竪穴住居が存続する中に柄鏡形住居が受容されているパターンがむしろ多いという。他地域で成立した外来系の柄鏡形住居が在来の住居型式に取って代わった形跡は認められず、在来の住居型式が存続する一方で一部の住居に柄鏡形住居の属性が導入された様子がうかがえるのである。他地域からの集団移住

のような受容形態は考えにくく、むしろ後述するような独特なイデオロギーが情報として受容されたことを推察させる在り方といえる。

同じく本特集掲載の論考で櫛原功一は、甲信地方における柄鏡形敷石住居の出現と波及について、中期末の地域の様相を検討している（櫛原二〇一七）。甲信地域では曾利Ⅳ式期にすでに敷石住居が出現していたが、櫛原によれば、それらは張出部を持たず在地の竪穴住居型式を継承するものと考えられる。柄鏡形住居が山梨県地方に波及するのは、曾利式土器文化の伝統が退嬰化して関東地方の加曾利E式土器文化の進出が顕著となる中期末のことであり、地理的には相模野地域に通じる桂川水系からの伝播が認められるという。甲信地方に先行して出現した敷石住居や石壇・石柱を有する住居が柄鏡形敷石住居の発生に系統的につながったという従来の説に対して、否定的な見解を提起している。

柄鏡形住居の受容にみられる関東地方南西部と北東部の地域差も、興味深い問題を映し出している。本特集掲載の論考の中で北関東地方の栃木県の集落遺跡群を検討した塚本師也は、栃木県地域での柄鏡形住居の受容が、中期末の段階では群馬県地域とは対照的にあまり積極的でなく客体的なものに留まっている点を指摘している（塚本二〇一七）。「地域社会」として柄鏡形住居の受容への志向性に差があったことを示唆する重要な問題提起である。関東地方西部・甲信地方にみられた中期末の地域文化の変動は、関東地方北東部にはそのままの形では当てはまらず、中期中葉から後期以降への集落の持続性が認められるという。そのような地域差が柄鏡形住居の受容の地域差にも現れているように見える。

後期初頭称名寺式期から後期前葉堀之内式期になると、柄鏡形住居は関東地方一円に分布を拡大するとともに、さらに東北地方南部へと波及していく動きをみせる。東北地方南部における柄鏡形敷石住居の受容の様相を検討した山

本陣久は、複式炉をもつ独自の住居型式が盛行していた大木9式・10式期には敷石の敷設という要素が部分的に取り入れられたのに対して、後期前葉になると関東の様相の柄鏡形敷石住居が受容されて一体化することを明らかにしている（山本二〇〇〇）。受容と波及の第二段階ともいうべき動向であり、これについても時系列に沿って各地域での受容の様相を整理していく必要がある。阿部昭典がこの課題にすでに着手しており、東北地方南部の大木式土器の分布圏に広がる複式炉を有する住居に代わって、柄鏡形敷石住居が北上する現象が把握されている（阿部二〇〇〇）。阿部は中部地方に出現した環状列石や配石遺構、柄鏡形敷石住居などが、いわば文化要素のパッケージとして東北地方に伝播していったことを論じている（阿部二〇〇八）。

③ 地域環境史との関連性

中部高地における中期縄文文化の退嬰化を気候の寒冷化を原因としたものと考えられる説がある（鈴木二〇一四）。植生史を基軸に縄文時代の環境変遷を論じた工藤雄一郎によると、完新世への移行から持続してきた温暖期は約五九〇〇年前、前期後葉の諸磯b式の頃に終わり、前期末から中期初頭頃に冷涼期へと転じた。冷涼な気候は中期を通して続き、後期・晩期にはさらに寒冷化が進行したとされている（工藤二〇一二）。標高の高い中部高地では、中期から後期にかけての寒冷化の影響が、関東平野などに比べて比較的早く現れた可能性がある。勅使河原彰は八ヶ岳西南麓の中期遺跡跡の分析に基づき、人口増加が飽和状態に達して食料資源が枯渇したことに加え、中期後半に進行した気候の冷涼化によって環境が悪化したことが、中部高地に繁栄した井戸尻文化を崩壊させることになったと論じている（勅使河原二〇一六）。植生をはじめとして地域の生態系が気候の寒冷化によってどのような影響を被ったのか、そしてそれが中期の生活と社会にいかなる影響を及ぼしたのか。環境史に関わるこうした問題への関心もまた、柄鏡形敷石住居の研究には必要となってくる。

平成二九年国史学会二月例会での討論会で、甲信地方における最近の調査状況を紹介した榊原功一は、富士山の火山活動と降下テフラによる自然災害が地域社会を動揺させる一つの要因となった可能性があるとの見方を示した。柄鏡形敷石住居の分布が関東地方西部から山梨県、静岡県東部に偏在する理由を説明し得る、一つの注目すべき指摘である。今後、具体的な事例研究に基づく検証が望まれる。

新富士火山の火山活動に関する最近の研究成果を整理した宮地直道によると、活動が比較的静穏で腐植質の富士黒土層（FB）の土壌形成が続いたステージ2（八〇〇〇～五六〇〇calBP）に対して、五六〇〇calBPから三五〇〇calBPのステージ3にはその様相が一変し、規模の大きな爆発的噴火が起こって溶岩や火砕流が噴出した（宮地二〇〇七）。考古年代に対比すると縄文時代前期後葉から後期中葉にあたる。中期後半の頃にあたる四八〇〇～四四〇〇calBPには、火砕サージや火砕流が発生していたとされる。

その時期の災害を考古学的に裏付ける事例も見つかっている。山梨県富士吉田市上中丸遺跡では、曾利式期の竪穴住居跡が富士火山のテフラによって埋没し、その後さらに火砕流によって遺跡が埋没した状況が捉えられている（山梨文化財研究所編二〇二二）。富士山の火山活動が中期後半頃に活発化していたことは、東京都多摩地域や神奈川県西部に堆積する赤色スコリアやローム質の褐色土からも知られ、ステージ3の火山活動の影響は富士火山の東側に位置する関東地方にも広く及んでいた可能性がある。榊原の指摘するとおり、今後の地域史的研究ではこうした火山活動史や災害史の視点が必要になってくる。

(三) 新たな分析方法の導入へ

正確な編年に基づく地域史の再構成が重要なことは言うまでもない。柄鏡形住居の事例を網羅的に集成し、時間

的・空間的に整理して、出現から消失にいたる過程を正確に把握する必要がある。検討対象となる地理的範囲が広い
ため、各地域の考古編年の併行関係を十分に吟味した上で、各時期の詳細な分布図を作成することが、最も基礎的な
課題といえる。しかし、前述した研究目標に接近するにはそれだけでは不十分である。今後の研究では、受容と拡散
の様相を解析する分析手法の開発が重要な課題になるであろう。

事例と遺跡の分布を解析する考古地理学的な検討がその一つである。縄文時代の遺跡群の研究においてもGISの
応用が広がってきたが、柄鏡形住居への応用研究は現時点でまだない。GISを応用した分布解析や立地分析を導入
すれば、柄鏡形住居の分布から読み取れる情報が質・量ともに確実に増える。たとえば遺跡間の移動コストが計算で
きるので、直線距離でなく時間距離を用いて移動・拡散のルートや遺跡間の関係の強さを推定することが可能である。⁽³⁾
中期中葉・後葉における集落遺跡の立地傾向と、中期末における柄鏡形住居の立地傾向を、地理学的に比較検討する
ことも、ぜひ取り組みたい課題である。

また、受容の実態を具体的に検討するための分析手法も必要である。川島義一が導入した住居属性の分析は、柄鏡
形住居の受容が集団移住のような単純な伝播・拡散によるものではなく、在来の系統の住居との併存や属性レベルの
融合があったことを明らかにしている（川島二〇一七b）。属性分析はこれまで主に遺物の研究に応用されてきたが、
住居型式の分析法としても有効であり、⁽⁴⁾受容の質的側面を解析するツールとなり得る。集落内での位置関係なども併
せて検討することで、受容の実態を遺跡ごと、地域ごとに比較検討することが可能となろう。これまでの議論の限界
を超えて、受容・波及・拡散という現象の意味の理解が深められることを期待したい。

Ⅲ 社会構造に関する論点

(一) 社会複雑化と柄鏡形住居

中期中葉から後葉に発達した環状集落がその継続性を失い解体していく中期末に、柄鏡形住居が出現、拡散したことは前述のとおりである。中期に発達した拠点的な環状集落は、広場や集団墓を中心とした同心円状の重帯構造と、住居や墓群をいくつかの単位に区分する分節構造を特徴とし、規則的な空間構成をもつ（谷口二〇〇五）。長期継続的な環状集落では、初期の住居は環の外周部分に構築されていることが多く、時期が下るにつれて徐々に環の内側に構築位置が移動する傾向があることも知られている（鈴木二〇〇六・二〇一一）。規則的な空間構成を踏襲する意識が当事者たちの中に常にあったからこそ、そのような規則性が現象化したものに違いない。しかし、長らく踏襲されてきたこうした空間規制は、柄鏡形住居の出現とともに放棄されてしまう。中期末から後期初頭の住居跡が継続的に残された環状集落の場合でも、中期後葉までに維持されてきた環状の規則的な空間構成は踏襲されおらず、環状集落に特有の空間的構造がみられなくなる。たとえば、群馬県三原田遺跡や東京都下野谷遺跡の環状集落では、柄鏡形住居はそれ以前の空間構成を無視するかのように、集団墓が位置する環の中央部に構築されている。

多数の土壙墓からなる集団墓を中心に位置づけた環状集落は、血縁的紐帯で組織された親族集団の存在を想定させている。出自や同族意識をアイデンティティーとする部族社会が成り立っていたことを、環状集落の空間構成は端的に表している。また、中期に顕在化した分節構造は、出自や系譜の区別が厳格なものとなって、社会内部が分節化していたことを物語る。分節的部族社会と呼ばれる社会構造である。筆者は環状集落に象徴されるこのような社会構造を「前期・中期的社会構造」と概念化し、縄文時代の社会進化上の一段階に位置づけている（谷口二〇〇五・二〇〇七）。

このような理解を前提に考えると、柄鏡形住居が環状集落の空間規制を踏襲せず、それを無視するような位置を取る現象は軽視できない。それまでの社会秩序を打ち破るような動きを露骨に示しているからである。祖先を中心的存在として強く意識したそれまでの求心的な社会構造ではなく、家屋単位の自立性が強まっているように映る。

さらに、柄鏡形住居の出現発達と軌を一にして、それ以前にはほとんど見られなかった新たな性格の構造物が発達して行く。環状列石・弧状列石・配石遺構・立石遺構など、多量の岩石を運び込んで構築された遺構群がそれである。中期後半の環状集落の中にもその発生形態と考えられる初源的な石造遺構が見られるが、その事例数は限定的である。環状列石などの列石遺構や配石遺構は、柄鏡形住居の出現とともに発達し、後期前葉から後期中葉に顕著な発達を遂げる。後期前葉になると、柄鏡形住居と列石・配石が複合する在り方が顕著となり、環状方形配石遺構と称する遺構や、柄鏡形住居の張出部に弧状の列石が接続した形態などが発生する。柄鏡形住居跡を覆うように配石遺構を構築した事例も多い。柄鏡形住居以後の遺跡の姿は、それ以前の様相とは明らかに異質であり、前期・中期的な社会構造に代わる新たな社会の成立を彷彿とさせるのである。

(二) 柄鏡形住居の特異性をめぐる議論

① 核家屋の問題

柄鏡形住居の性格については、入念な敷石行為を伴ったその特異な構造から特殊施設とみる意見もあり、一般的な住居なのか特殊な施設なのかという議論が当初からあった(村田一九七五、山本一九七六)。調査例の増加と編年的研究の進展とともに、中期末・後期初頭の一般的な住居形態であるとの理解が広がったが、柄鏡形住居の特異な性格については現在も議論が続いている⁵⁾。とりわけ、石井寛が提起した「核家屋」論(石井一九九四)が研究史のターニン

グポイントとなつて、柄鏡形住居の性格問題が縄文社会論の中の重要課題としてあらためて議論されるようになった。

「核家屋」とは、石井が神奈川県横浜市小丸遺跡の後期集落の分析で着目し、概念化したものである（石井一九九四）。小丸遺跡の後期集落は舌状台地上に堅穴住居群が環状にめぐり、一見したところでは環状集落であるが、その空間構成は中期のそれとは異質である。集落内に土壙墓が集中する場所が二箇所に見られるが、その位置は広場の中央ではなく著しく偏っており、とくに土器を副葬した一群は集落の北西側にあたる部分に密集している。そして、その墓群を前面に見るやや小高い位置に、集落内で最も大形の家屋が位置している。集落全体を見渡せる「要」の位置を占めるこの住居跡は、同じ場所で構築を繰り返しており（多重複住居）、遺構の形成過程の点でも他の堅穴住居とは様相が異なっている。石井はこの特殊な家屋の性格について、葬送儀礼などに中心的な役割を果たした長の家との解釈を示し、「核家屋」という新たな術語を以て概念化したのである。

石井はその後、柄鏡形敷石住居の成立と展開に関する研究において、核家屋が後期前葉に顕在化する以前からすでに存在し、柄鏡形敷石住居の発生段階にまでさかのぼる可能性に言及した。石井が注目したのは、加曾利E3式古段階にさかのぼる成立段階の柄鏡形敷石住居と環状列石が発掘された群馬県野村遺跡であり、緩斜面上方に位置する典型的な柄鏡形敷石住居が、環状列石との位置関係においても住居構造においても他の住居とは異質で、特異性を帯びた「特定家屋」であったとの見方を示している（石井一九九八）。石井はさらに、後期の掘立柱建物に関する研究を進める中で、柄鏡形住居の系統を引く堅穴住居と掘立柱建物とを系統の異なる家屋と考え、この差異を集団の違いに還元して説明している（石井二〇〇七）。石井の一連の研究は、後期集落の成り立ちが均等同質な家屋の単なる集合体ではなく、不均等あるいは系統差を内包するより複雑な構成をもつことを浮き彫りにするものであったといえる。

石坂茂はこうした議論を受けて、関東・中部地方における後期前葉・中葉の二六遺跡を分析対象として核家屋の実態を検証している（石坂二〇一七）。他の住居とは区別された核家屋が広く存在することを指摘するとともに、核家屋を中核として成り立つ集落を「核家屋集落」と称している。そして、その中でも列石遺構と複合した特殊な核家屋をもつ五箇所の遺跡に注目し、集落間の性格の差と階層的構造について論じている。石坂は前に、中期末における環状列石の規模や形態に差異がある点に注目し、大規模な環状列石、大規模な弧状列石、小規模な弧状列石の三種類に分類するとともに、前者を頂点とする祭祀の階層的構造があったと論じていた（石坂二〇〇二・二〇〇七）。石坂は、環状列石の築造が衰退した後も、こうした階層的構造が核家屋に引き継がれたと考えるのである。石坂の所論は、一集落内における家屋間の格差・機能差だけでなく集落間にも格差があった可能性に言及するものであり、「核家屋」への問題関心をさらに掻き立てることとなった。

佐々木藤雄も核家屋の存在意義に注目する論者の一人である。佐々木は、食料貯蔵の発展過程で家族単位の個別労働と生産物の私的占有が生じたことが縄文社会の中にある種の不均等・不平等を生み出したという先鋭的な議論を一九七〇年台から展開してきた（佐々木一九七三・一九七四・一九九三）。低生産で発展の力を持たない原始共同体という当時の常識的な縄文社会像を批判し、縄文時代の生産と経済の歴史の中に社会複雑化の要因が内在したと考えるのが佐々木の立場である。史的唯物論を縄文時代の実地の資料分析に適用した独自の試みであると同時に、現在につながる階層化社会論の原点でもあった。佐々木の論考はその後、環状列石や柄鏡形住居の研究を通してさらに深められることとなった（佐々木二〇〇二・二〇〇五・二〇〇七a・二〇〇七b）。佐々木によれば、環状列石が中期後葉の環状集落の中からその中央墓地を結界する形で発生したのは、そこが共同体のすべての構成員を埋葬する集団墓でなく特定の階層に属す人々の「特定集団墓」であったからであり、その祭儀を管掌し環状列石の築造と維持管理を統括し

た指導者層の存在が想定される。また、環状列石の外縁に付帯するクラの意義については、指導者層の威信が儀礼祭祀の管掌だけでなくクラの収納物に対する管理運営権を基礎にしていたとの解釈を提起している。つまり、生産力の発達と余剰の一定の蓄積が生み出した経済的不平等が、祖先祭祀の管掌と結びついて、社会的な威信の序列を作り出したという見方を取るのである。佐々木は柄鏡形敷石住居がもつ呪術性、および環状列石との強い結びつきを重視し、柄鏡形敷石住居の中に「核家屋」につながる特殊家屋の系譜がつねに内包されていたと考える。そして、そうした特殊家屋の主こそが指導者層にあたる可能性を論じている（佐々木二〇〇三）。

核家屋を通して社会階層化の問題を考察した三者の研究を紹介したが、その一方にはこうした議論に対する激しい批判も表明されている（山本二〇〇四・二〇〇五・二〇一六）。核家屋の問題は、単に柄鏡形住居の性格だけでなく、縄文時代の社会複雑化・階層化というより大きな歴史的問題に関わる重要な論点である。個別具体的な事例で集落構造の分析を積み重ね、検証していくべき仮説である。

② 柄鏡形敷石住居と環状列石の関連性

環状列石と柄鏡形敷石住居との関連性も一つの論点となっている。

環状列石の発生については、中期の環状集落の中央部に構築された「集落内環状列石」をその初源と考える佐々木藤雄の説が有力である（佐々木二〇〇五・二〇〇七a）。佐々木は、環状列石が中期後葉の環状集落の中からその中央墓地を結界する形で発生してくることを論じ、これを日常空間と非日常空間との明確な結界によって祖先祭祀をより高次なもの高めようとした動きと解釈した。環状集落の中央墓地を舞台におこなわれてきた共同祭儀がより高次な祖先祭祀の場に純化されたものと理解するのである。佐々木は、環状列石の周囲に柄鏡形住居群が展開する群馬県野村遺跡の事例や、柄鏡形敷石住居の前面に弧状の列石・配石が取りつく事例に注目し、柄鏡形敷石住居がその出現期に

環状列石や配石遺構と密接に結びついていたことを指摘する。そして、柄鏡形敷石住居が祭儀の場を結界する環状列石とともに呪術性に覆われた特殊な家屋として出現した可能性を論じている（佐々木二〇〇三）。

秋田県大湯環状列石や同県伊勢堂岱遺跡、青森県小牧野遺跡、北海道鷲ノ木5遺跡などに代表されるように、後期前葉の東北地方北部・道南地域では環状列石や配石遺構の築造が広がった。阿部昭典と佐々木藤雄は、中期後葉の中部・関東地方に出現した環状列石が後期前葉までに東北北部や北海道に伝播したものと捉え、中期から後期への縄文文化の変化の背景に、広域的な情報の伝播・受容があったことを論じている（佐々木二〇〇七b、阿部二〇〇八）。中部・関東地方と東北・北海道地方にまたがる広域的な文化要素の共有現象は、類縁関係にある綱取式土器と堀之内1式土器や、広域分布圏を形成した加曾利B式土器に見られるように、後期前葉から中葉に特に顕著となる。掘立柱建物の型式と系統の分析からも、関東・東北地方の広域的関係が指摘されている（石井二〇〇七）。中期後葉ないし中期末の中部・関東地方に発した社会変動は、局地的な動向に終わらず、後期のこの広域化現象に何らかの形で関係していた可能性が出てきた。現時点では問題の輪郭がはっきりしないが、縄文時代史のより大きな論点となり得る問題であり、今後の議論の深まりを注視しておきたい。

③ 葬制との関連性

柄鏡形住居と埋葬との関連性も一つの論点となっている。柄鏡形住居内での埋葬を示唆する事例の存在は早くから注意されており、張出部を埋葬空間とみなす説も提起されていた（村田一九七五）。また、張出部や接続部に埋設される埋甕の性格についても、死産児・嬰兒を埋葬した可能性がかねてから指摘されてきたところである（桐原一九六七・渡辺一九六八）。ここでは、新たな着眼点からの検討を試みる最近の研究事例を取り上げる。

石井寛は中期末から後期前葉の住居跡内部に造られた墓壙（住居址内墓壙）に注目し、個別住居を単位とした埋葬

を示すものとしてその意義に注目している。墓壙以外の土坑も含め「床下土坑」として事例の集成と分析をおこない、土坑の形態や家屋内での位置、盛行時期、埋甕との関連性などの現象面を整理している（石井二〇一一）。床下土坑を体系的な検討の俎上にのせた最初の論考であり、この基礎的研究を通して柄鏡形住居内で埋葬がおこなわれた事実があらためて明確となった。⁶ また、墓壙が造られた場所に一定の傾向があることも明らかとなり、住居主体部の壁際と張出部に多く、後者は埋甕が埋設される位置に重なることから両者の間に系譜関係も想定されるとの見解が示されている。

四本の大形石棒が完形のまま遺棄された特異な事例として注目を集めた、東京都緑川東遺跡の敷石遺構SV1でも、方向を揃え左右に二本ずつ配列された大形石棒の下部から、長径約一五〇cmの長楕円形の土坑が検出されている（株式会社ダイサン編二〇一四）。この土坑の性格について、安孫子昭二は東京都小田野遺跡の類例との比較検討から墓壙と推定している（安孫子二〇一五）。緑川東問題の公開討論会に参加した中村耕作は、件の土坑を石井のいう「床下土坑」の一例と捉え、埋葬用土壙の可能性の有無を検討している（中村二〇一七）。同時期の関連資料との比較考証から、この床下土坑の内部あるいは大形石棒に挟まれた空隙に遺体が埋葬された蓋然性はあるとの判断を示している。このように、住居址内墓壙の問題が柄鏡形住居の性格に関わる一つの検討課題に浮上してきた。

筆者は、東京都はけうえ遺跡6a号住居の奥壁部に遺棄された再葬土器棺、ならびに9号住居跡の奥壁部に掘られた土壙とその儀礼行為を検討し、柄鏡形住居と再葬制という一見無関係な二つの考古学的現象に、共通する思想的背景があることを論じた（谷口二〇一七b）。柄鏡形住居の張出部に埋甕や対ピットによって結界を設ける行為と、死を瞬間的な生物死ではなく他界への長い移行プロセスと考える再葬制は、境界に対する強烈な意識が通底しており、通過儀礼としての共通の本質が見出せる。家屋への出入りにおいても、また葬送儀礼においても、境界での通過儀礼を

強化していたことが伺え、柄鏡形敷石住居とはこうした観念を物質化して可視化するものであったと理解することができる。はけうえ遺跡6a号住居に遺棄された土器棺は、東北地方北部の蛍沢I式に類似し、彼の地の再葬制が伝播した可能性が考えられる。東北地方北部では後期初頭から前葉に土器棺再葬墓の発達が見られるが(葛西二〇〇二)、すべての人に対する一般的な葬法ではなく、ごく少数の限られた人物を対象とした特別な取り扱いである。⁽⁷⁾ 葬制上特別な取扱いを受ける特殊な地位の人物が柄鏡形敷石住居成立の社会的背景となっていた可能性は、核家屋の議論からも示唆されていたが、葬制の面にも同じ問題が垣間見えている。

(三) 社会構造に関わる課題整理

柄鏡形住居という特異な家屋の歴史的性格を考察するには、その背後にあった社会構造への視点が不可欠である。その点は誰しも否定できないであろう。しかし、基礎的事実の捉え方が研究者によって異なり、実証的に議論するにはまだ課題が多い。

具体的な検討課題の一つとして、家屋間の格差や遺跡間の格差の検証が挙げられる。柄鏡形住居の性格に関するこれまでの議論は、柄鏡形住居全般を一括りにして一般的な住居か儀礼祭祀に関わる特殊遺構かを論じる傾向があった。しかし、核家屋や環状列石に関する議論を通して、個々の家屋や集落が必ずしも平等・均質な関係ではなく、格差や位階的な序列を含むより複雑な関係の中に組織されていた可能性を考慮しなければならなくなってきた。そのような観点からの集落構造の分析と仮説の検証が必要であり、それを踏まえて柄鏡形住居の性格論争を止揚していくべきである。

もう一つの重要なテーマが柄鏡形住居と葬制との関連性である。柄鏡形住居における埋葬あるいは再葬について

は、人骨や装身具の出土といった直接的な証拠が乏しく、今のところ床下土坑や土器棺などの状況証拠を手がかりに組み立てられた推論に留まっている。遺構覆土の水洗選別などを導入して微細遺物を徹底的に回収する調査法が有効な検証の手立てとなろう。また、柄鏡形住居跡ではしばしば大形石棒を用いた儀礼的行為の痕跡が見出されるが、大形石棒の祭儀が葬制と密接な関連性を有していたことは、これまでも筆者が具体的な根拠資料を挙げて論じてきたとおりである（谷口二〇一七a）。床下土坑の覆土だけではなく、大形石棒の周囲に残る堆積物の内容も注意深く調べたところである。

IV 象徴性に関する論点

(一) 柄鏡形住居の象徴性と儀礼

家屋の構造は、住まう人の帰属する文化に固有の信仰や世界像を象徴的に表現する一面をもっている。カムイの出入口となる神聖な神窓を東に設けたアイヌ家屋や、艮を鬼門として忌み嫌う日本人の信仰などがその例である。家屋の形と構造は文化に固有のイデオロギーや精神世界を可視化する側面をもち、その意味で「文化景観」の一部ということが出来る。縄文時代の家屋にも象徴性を帯びた構造や空間分節が実際に見られ、当時の人々の観念・思考がさまざまな形で投影されていることが分かる。竪穴住居跡を「景観の考古学」の研究対象に位置づけ、当事者たちの認知構造や観念形態を読み解く必要がある（谷口二〇〇九）。

柄鏡形住居はこのような文化景観論の視点から見ても、非常に興味深い研究対象である。中期の竪穴住居跡に見られる空間分節を検討してみると、中期中葉以前と中期後葉以後とで主軸に対する意識や空間分節のあり方に質的な変

化が生じている（谷口二〇一一）。中期中葉には左右の空間分節として表される二元論的な区分が特徴的であるが、中期後葉になると奥壁部に聖的空間が作り出されるとともに主軸が強く意識されるようになり、炉や出入口も象徴性を帯びてくる。中期末における柄鏡形敷石住居の出現は、こうした変化の延長上に出現したものであり、主軸上や出入口での空間結界と儀礼を發達させた点に特質を見出せる。竪穴住居に現れたこうした変化が、環状集落の衰退と並行して起こっていたことは興味深く、中期末に出来た社会的動揺への文化的反応としてイデオロギーの強化ないし再編が行われたことを暗示している。

当事者たちのイデオロギーを物質的な痕跡として留めているものも一つある。柄鏡形住居跡に残された儀礼的行為の痕跡と遺物である。柄鏡形住居跡では儀礼的行為がおこなわれた状況や痕跡がしばしば残されている。その出現頻度は、それ以前の段階に比べて明らかに高い。そのなかでも特に際立っているのが、火入れの行為と大形石棒の破壊・遺棄行為である（山本一九九八・二〇〇六）。こうした儀礼的行為の分析も、柄鏡形敷石住居の性格を解き明かしていくための重要なアプローチである。

柄鏡形敷石住居という特異な構造の家屋が出現した理由は、当事者たちの信仰や観念を捨象しては到底理解できないであろう。これが第三の視角となる。ここでは柄鏡形敷石住居に残されたいくつかの特徴的な現象面に注目し、儀礼や象徴性に関する検討課題を整理してみる。

（二）儀礼的行為と観念形態

① 張出部の象徴性

柄鏡形住居を特徴づけている張出部については、単なる通路としてではなく、その象徴性に注目する議論がなされ

ている。「埋甕」を手かがりとした研究がその一つである。柄鏡形住居における埋甕の埋設位置には強い規則性があり、住居主体部と張出部との接続部、張出部の先端、およびその両方の事例が圧倒的に多い（川名一九八五、山本一九九六・一九九七）川名広文は、埋甕の埋設位置だけでなく埋設姿勢にも一つの有意な傾向があることを突き止め、家屋主体部の中心（炉の方向）に向けて傾斜させた斜位埋設に重要な意味があると考えた。また、埋甕の口縁部がしばしば床面から突出している点にも注目している。そして、張出部を住居内空間と外界との間の過渡的、両義的空間と捉え、そこを通過するには境界標としての意味をもつ埋甕を意識的に跨ぐ動作を伴った儀礼的行為が必要であったと論じている。

また、主体部と張出部の接続部に設けられる一対の特殊な柱穴、いわゆる「対ピット」も、境界を強く意識した構造となつている。同じく川名は、対ピットが主体部の中心に向かってハの字状に狭まり掘り方が深くなる特徴をもつことに注目し、故意に狭間を作り出しているものと解した（川名一九八五）。村田文夫も同様の見解を示しており、対ピットの間隔が四〇〜五〇cmで大人が辛うじて通過できる狭さである点に境界としての象徴的意味を見出している（村田二〇〇六）。筆者もまた、張出部および主体部との接続部に、埋甕や対ピット以外にも箱状石囲施設・框石など境界標と考えられる不可思議な構造物がさまざまな形で作り出されている例を列挙し、張出部に境界としての象徴的意味があつたことを論じた（谷口二〇一七a）。

柄鏡形住居の張出部には屋内空間と外界との境界としての象徴的意味があり、その通過には儀礼的行為が伴っていた。これは柄鏡形住居の本質に関わる重要な仮説であり、その妥当性を多くの調査事例で意識的に検証していくことが今後の課題となる。

② 柄鏡形住居と石棒儀礼

大形石棒は中期に出現・発達した最も顕著な宗教的遺物である。有頭大形石棒の起源は中期初頭にさかのぼり、中期中葉から後葉にかけて北陸・中部・関東地方に広く受容されたことが知られている。大形石棒の出土例が著しく増加するのは中期末から後期初頭であり、柄鏡形住居内での出土が特に目立っている。ただし、この増加現象は大形石棒の製造自体が飛躍的に増加したことを必ずしも意味しない。柄鏡形住居内に遺棄された石棒の大部分が破断していたり火熱を受けて爆ぜていたりすることから、石棒の伝世・継承を中止する最後の儀礼であった可能性も考えられるからである。その点に留意する必要があるが、大形石棒に対する儀礼的行為と柄鏡形住居という場との間には、明らかに有意な関係があり、そこでおこなわれた行為を詳しく分析する必要がある。

東京都光明院南遺跡F地点の柄鏡形住居跡では、大形石棒が放棄されるまでの複雑な儀礼行為が捉えられている（杉並区内遺跡発掘調査団編二〇一一）。その出土状況は一見、柄鏡形住居内で石棒が焼かれて破砕しているようだが、実はそう単純ではなく、火熱による石棒の破砕行為のほかに、石棒の基部に加えられた執拗な打ち欠き行為、破砕した石棒破片の集積行為、一部の破片の抜き去り行為があったことが復元されている。本事例を詳細に分析した中島将太は、ほぼ同じパターンの行為が東京都新山遺跡にも見られることを挙げて、それが石棒放棄時の儀礼的な取り扱いの一つの型ないし作法であった可能性があると考察している（中島二〇一五）。

東京都緑川東遺跡では、完形の大形石棒4本が、深い掘り込みをもつ敷石遺構の中央部に向きを揃えて並列して埋設された状態で発見された（株式会社ダイサン編二〇一四）。敷石遺構の周縁部には柱穴と推定されるピットと周溝があることから上屋をもつ建物跡と推定されるが、同遺跡で見つかっている柄鏡形敷石住居とは掘り方の深さや平面形が異なる。前述のとおり、四本の真下には墓壇を彷彿とさせる細長い土坑（一五〇×四〇cm）があり、それを覆つ

て石棒と敷石が置かれている。四本が同時に埋められた点は疑いないが、筆者の観察所見では、二段笠形の三本にたいして一段笠形の一本は頭部形態や石材の材質が異なり、やや風化が進んでいる。製作時期や保管場所が異なるものが、最終的にここに集められて一括して埋められた可能性が高い。隣接地には中期の拠点的な環状集落として知られる向郷遺跡が位置し、同集落が衰退した直後にこの特殊な大形石棒の一括放棄がおこなわれたのは偶然ではあるまい。中期的な環状集落が解体していく時期にそれまで継承されてきた大形石棒の伝統的祭儀が中断された可能性がうかがえる。光明院南遺跡の場合とは、石棒に対する行為と取り扱いが異なり、目的の異なる別種の儀礼の可能性を示唆している。

大形石棒のモノの研究を石棒儀礼というコトの研究に昇華させるには、儀礼祭祀の研究法の確立が前提的な課題となる。筆者の考えでは、遺構・遺物に残された物質的狀況から具体的な行為とプロセスを復元し、多くの事例に共通する行為の型を認識していくという方法的手続きが基本となる(谷口二〇一二)。石棒の型式分類と編年によって石棒のカテゴリーを捉えようとする別のアプローチもあるが(長田二〇一三)、儀礼の行為的側面を分析せずに石棒の象徴性に接近することはできないというのが筆者の立場である(谷口二〇一五)。中島の研究のような優れた事例研究を積み重ね、モノと場と行為の関係態からなる石棒儀礼の行為的側面を明らかにしていくことが、当面の課題である。

③ 遺跡形成論の視点

柄鏡形住居跡では火入れ行為や配石を伴った儀礼的行為の痕跡がしばしば観察されている。こうした事例を網羅的に検討した山本暉久は、その性格を「住居廃絶儀礼」と結論づけている(山本一九九八)。山本の見解によれば、中期末・後期初頭に増加する大形石棒の儀礼も、後期前葉・中葉に顕著な環礫方形配石遺構や周堤石、弧状列石なども、柄鏡形住居の廃絶時におこなわれた特徴的な住居廃絶儀礼の一環であるという。

しかし、柄鏡形住居跡に見られる儀礼的行為はさまざまであり、住居廃絶儀礼として一括りにできるものかどうかについては異論も提起されている。張出部や連結部に埋設された埋甕の場合は、家屋の建築時または居住期間に施設されたものと判断できるが、石棒儀礼や配石行為のタイミングは一定ではなく、建築時・居住期間・住居廃絶時・廃絶後のさまざまな行為が含まれている。儀礼行為のタイミングをどのように捉えるかによって、儀礼そのものの性格の理解や解釈にも違いが生じてしまう。一例を挙げれば、張出部に接続するように構築された配石遺構について、山本は住居廃絶儀礼の一環と見るのに対して（山本一九九八）、石坂茂は柄鏡形住居に伴う構造の一部と判断して山本説に反論している（石坂二〇一七）。

前述した東京都緑川東遺跡の事例についても、敷石遺構の構築、大形石棒の遺棄を含めた行為の流れや時間的経過に対する事実認識が研究者によって異なり、解釈が分かれる事態となっている（五十嵐二〇一六）。これもまた事実認定の違いが異なった解釈を導くことをあらためて浮き彫りにした。

石棒を用いた儀礼に限ってみても、儀礼的行為の実際は予想以上に複雑である。予断を持たず、行為の痕跡とその流れを現場で観察・記録することが肝要である。また、儀礼行為そのものの流れだけでなく、柄鏡形住居自体のライフサイクルを具体的に検討する必要がある。柄鏡形敷石住居における敷石のタイミングもすべてが当初の建築時であったかどうかは予断を許さない。いま問題にしている儀礼的行為のタイミングやプロセスも、行為の場となった柄鏡形住居自体の時間的流れの中に位置づける観察視点が必要になる。すなわち、遺跡形成論の視点である。

遺跡形成の視点から柄鏡形住居跡を検討した研究例としては、山本典幸が武蔵台東遺跡の柄鏡形住居跡を用いておこなった分析例がある（山本二〇一六）。そこでは廃絶された柄鏡形住居跡の敷石の石材の一部を新たな柄鏡形住居の建築に際して再利用する行為が復元されている。中期の竪穴住居の調査では石囲炉の石材の一部を廃絶時に持ち出す

行為が知られ、家系の継承に関わる儀礼行為との見解も提起されていたが（大林一九七二）、敷石住居の石材利用も単純な建材としてではなく、当事者にとつては象徴的意味をもっていた可能性がある。

後期前葉堀之内Ⅰ式期から後期中葉加曽利BⅠ式期には、特定住居（核家屋）と結びつく形で墓群造宮と配石構築がおこなわれる現象が顕著に見られる。阿部友寿は遺跡形成の分析視点からこの現象を示す典型的な諸事例を検討し、行為の累積と循環によって住居と墓との間に密接不離の関係が形成されていくことを明らかにしている。阿部はそこに特定世帯を中心とした集団関係と、世代を超えた系譜観を読み取ろうとしている（阿部二〇一五・二〇一六・二〇一七）。これもまた遺跡形成論的な分析の有効性を例示する研究であり、現象の深層にある問題への接近が不可能ではないことを予見させる。

（三）象徴性と意味の解釈に至る方法論上の課題

柄鏡形住居の問題に限らず、考古資料から過去の当事者たちが観念していた象徴性や意味に接近することは至難である。儀礼祭祀を考古学の研究対象とする場合にも、意味や象徴性の考察に到達するための妥当な方法的手続きを確立させなければならない。

私たちが直接に観察可能なものは、遺跡に残された遺物とその出土状況である。そこからモノと場と行為の関係態を捉え、儀礼祭祀の行為的側面を明らかにしていくことが、研究の出発点となる。そして、複数の事例に共通してみられる行為のパターンを捉え、儀礼や祭式にかかわる記号論的なコードを注意深く識別していくことが、その次の検討課題となる。同時にまた、柄鏡形住居のライフサイクルを含め、遺跡形成過程を詳細に分析するとともに、儀礼的行為をその時間的流れの中に位置づける視点が重要であることも、認識されるようになった。柄鏡形住居の研究は、

儀礼祭祀の研究法を深化させる実践の場でもある。

柄鏡形住居に伴う周堤礫や前庭部の配石遺構について山本と石坂の理解が対立していたように、遺構や遺跡の形成過程について研究者間に見解の相違が目立っている。緑川東遺跡における大形石棒の遺棄をめぐる議論にも、それが端的に表れていた。事実は一つであっても調査者・研究者の見方や理解は必ずしも一様ではない。見解の相違それ自体は悪いことではないが、水掛け論に陥っては議論が発展しない。反論の応酬ではなく、事例に即した反証が必要とされる。

V 結 語

調査研究の蓄積につれて柄鏡形住居に対する問題関心は次第に深められてきたが、課題は山積であり、容易ならざる研究対象であることをあらためて思い知らされる。それはあたかも現在の日本の先史考古学が過去をどこまで解明し得るのかを試す試金石のようにも思える。

本稿では、地域史・社会構造・象徴性という三つの異なった切り口から、柄鏡形住居をめぐる論点と研究課題を整理した。最後に指摘しておきたいのは、三つの断面に見えている諸問題の相互の関連性を総合的に説明する、より高次の課題である。

柄鏡形住居の出現、盛行した時代が、中期的文化から後期・晩期的文化への移行期に位置づけられることはすでに述べた。中部・関東地方に開化した中期縄文文化が退嬰化して衰退し、それに代わって儀礼祭祀の要素の強い後期・晩期の文化へと、縄文文化の様相が大きく変質していく移行期に、こうした特異な家屋が発達したことの意味を追究

しなければならぬ。本稿で指摘した課題だけを見て、考慮すべき問題の複雑さが分かる。内陸地帯における中期縄文文化の衰退を招いた環境要因、拠点的な環状集落の解体に象徴される社会構造の変化、核家屋や環状列石の発達に垣間見える社会階層化、再葬制に表れた他界観の形成、儀礼祭祀を管掌する人物ないし組織の存在など、柄鏡形住居から見えてくる諸問題は環境・社会・精神文化の領野に大きく跨っている。これからの研究では、それらの諸問題を総合する理論的枠組みが問われることになる。

基礎的事実の実証的解明が最重要であることは言うまでもない。しかし、それと同時に複雑多岐にわたる諸問題を合理的に説明し得る理論的枠組みを意識的に構築していかなければ、柄鏡形住居の歴史的性格を説明することはできないであろう。このことを指摘して本稿の結びとする。

謝辞 ご多忙のなか特集号にご寄稿いただきました各位に感謝します。長年にわたり柄鏡形住居の研究をリードされて

きた山本暉久氏には、本年二月の国史学会例会での研究発表をお願した上に、本誌へのご執筆を快諾していただいた。中期環状集落の空間構成にみる規則性について、鈴木保彦氏よりご教示を得た。共々、心より謝意を表します。

註

(1) 柄鏡形住居の細長い出入口の名称は「張出部」と「柄部」の二つが通用しており、統一的用語となっていない。本稿では「張出部」を用いる。

(2) 北陸地方中期前葉の土偶を祖型として中期中葉勝坂式

期に中部高地で成立し、中期後葉の曾利式期に型式変遷しながら継承された立像形土偶の系統を「勝坂系土偶伝統」と称している(谷口一九九八)。勝坂式土器が終息し中期後葉に加曾利E式土器の分布圏となった関東地方では、勝坂系土偶の系統は継承されたものの、土偶が小型で抽象的な造形に変化した。「多摩9型」と称するこの小型抽象形土偶は、甲信地方の曾利式土器文化との関係が深い多摩地域や相模野地域を中心に分布しているが、柄鏡形住居が登場する加曾利E3式(新)期までには消失した(安孫子二〇一一)。

(3) GISを用いて遺跡間の移動コストを求める方法がいくつかある。たとえば、中村大はドローネ三角網を応用して最小コストの経路を推定する手法で縄文時代遺跡群の分布と遺跡間関係を解析している(中村二〇二二)。こうした研究例が参考になる。

(4) 縄文時代の竪穴住居を対象とした属性分析のケーススタディーはまだ少ない。筆者は、青森県三内丸山遺跡の竪穴住居二二〇棟を対象に属性分析をおこない、統計学的手法による遺構の数値分類を試みた。多変量解析の変数に用いたのは、竪穴面積・平面形などの四つの数値データ、および支柱穴配置・炉型式など七属性三一カテゴリーの質的データである。属性分析と統計解析を導入することで人間の視覚による型式分類とは異なるグルーピングが可能であり、集落の空間構成や景観を復元する有効な分析法になり得ることを示した(谷口二〇〇四)。

(5) 柄鏡形敷石住居の特異な性格については村田文夫が問題を提起し続けている。村田は、日常的な居住空間とは考えられない特異な様相を示す東京都小田野遺跡SI8・SI10の事例復元を論拠に、儀礼や秘儀がおこなわれた特殊施設と主張している(村田二〇一三)。

(6) 住居址内墓壙から人骨が出土した事例として、千葉県権現原貝塚2号住居址(幼児の歯・成人の歯)、同12号住居

址(二歳未満の幼児骨・六カ月程度の乳児骨)が挙げられる。乳幼児の埋葬がおこなわれた事実がわかるが、住居址内土坑の中には長径一五〇〜二〇〇cm以上の規模も多く、石井はすべてが乳幼児埋葬用であったとは考えにくいと論じている(石井二〇一一)。

(7) 東北地方北部の後期初頭・前葉に盛行した土器棺再葬墓では、人骨が遺存した一四遺跡例はすべて成人骨で、男性・女性をともに含んでいる(葛西二〇二二)。青森県薬師前遺跡の3号棺に納められた壮年女性は、左手首に七個のベンケイガイ製貝輪を装着し、イノシシ牙製の首飾り一連一二点が棺内に納められていた(倉石村教育委員会編一九九八)。被葬者の特殊な地位・階層を推定させる一例である。

引用文献

- 阿部昭典 二〇〇〇 「縄文時代中期末葉〜後期前葉の変動―複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及―」『物質文化』六九、一―三九頁
- 阿部昭典 二〇〇八 『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
- 阿部友寿 二〇一五・二〇一六・二〇一七 「関東南部における住居と墓の関係(一)(二)(三)」『神奈川考古』五一、

- 四一―六八頁、同五二、三七―六六頁、同五三、三一―五六頁
- 安孫子昭二 二〇一一『縄文中期集落の景観』アム・プロモーション
- 安孫子昭二 二〇一五『東京の縄文学』之潮
- 石井 寛 一九九四『縄文時代後期集落の構成に関する一試論―関東地方西部域を中心に―』『縄文時代』五、七七―一〇頁
- 石井 寛 一九九八『柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察』『縄文時代』九、二九―五六頁
- 石井 寛 二〇〇七『後期集落における二つの住居系列―柄鏡形住居址系列と掘立柱建物跡系列―』『縄文時代』一八、五一―八二頁
- 石井 寛 二〇一一『縄文時代後期の住居址内土坑』『縄文時代』二二、四三―七二頁
- 五十嵐 彰 二〇一六『緑川東問題―考古学的解釈の妥当性について―』『東京考古』三四、一―一七頁
- 石坂 茂 二〇〇二『縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現―各時期における拠点集落形成を視点とした地域的分析―』『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』二〇、七一―一〇二頁
- 石坂 茂 二〇〇七『環状列石(関東・中部地方)』『縄文時代の考古学十一』一五八―一七〇頁、同成社
- 石坂 茂 二〇一七『核家屋』集落の構造―群馬県横壁中村遺跡を中心とした分析―』『縄文時代』二八、一―二六頁
- 大林太良 一九七一『縄文時代の社会組織』『季刊人類学』二(二)、三―八一頁
- 長田友也 二〇一三『石棒の型式学的検討』『縄文時代』二四、三三―五七頁
- 小畑弘己 二〇一六『タネをまく縄文人』吉川弘文館
- 葛西 勳 二〇〇二『再葬土器棺墓の研究―縄文時代の洗骨葬―』同刊行会
- 株式会社ダイサン編 二〇一四『緑川東遺跡―第二七地点―』国立あおやぎ会
- 川島義一 二〇一七 a 『柄鏡形住居の出現期の再検討―地域の遺跡群研究の視点から―』『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』四八、一九三―二一〇頁
- 川島義一 二〇一七 b 『住居属性分析からみた柄鏡形住居出現期の様相』『国史学』二三三号(本特集号所収)
- 川名広文 一九八五『柄鏡形住居址の埋甕にみる象徴性』『土曜考古』一〇、七三―九五頁
- 桐原 健 一九六七『縄文中期に見られる埋甕の性格について』『古代文化』一八(三)、四三―五一頁
- 榑原功一 二〇一七『敷石住居の出現期の様相―甲信地域を

- 中心に——『国史学』二二三号（本特集号所収）
- 工藤雄一郎 二〇一二『旧石器・縄文時代の環境文化史——高精度放射性炭素年代測定と考古学——』新泉社
- 倉石村教育委員会編 一九九八『薬師前遺跡 縄文時代後期 集合改葬土器棺墓調査』倉石村教育委員会
- 佐々木藤雄 一九七三『原始共同体論序説』共同体研究会
- 佐々木藤雄 一九七四『原始共同体論の陥穽』『異貌』一、二 一—二〇頁
- 佐々木藤雄 一九九三『和島集落論と考古学の新しい流れ——漂流する縄文時代集落論——』『異貌』一三、四六—一二三頁
- 佐々木藤雄 二〇〇二『環状列石と縄文式階層社会——中期・後期の中部・関東・東北——』『縄文社会論（下）』三一五〇頁、同成社
- 佐々木藤雄 二〇〇三『柄鏡形敷石住居址と環状列石』『異貌』二一、一二—一二九頁
- 佐々木藤雄 二〇〇五・二〇〇七 a 『環状列石初源考（上）（下）——環状集落中央墓地の形成と環状列石——』『長野県考古学会誌』一〇九、一一—一七頁、同一二〇、一一—二八頁
- 佐々木藤雄 二〇〇七 b 『海峡を渡った環状列石——重環状構造をもつ『葬祭型環状列石』の系譜と環状周堤墓——』『縄文時代の社会考古学』一六三—一八八頁、同成社
- 杉並区内遺跡発掘調査団編 二〇一二『光明院南遺跡F地 点』杉並区内遺跡発掘調査団
- 鈴木保彦 一九八六『中部・南関東地域における縄文集落の変遷』『考古学雑誌』七一（四）、三〇—五三頁
- 鈴木保彦 二〇〇六『縄文時代集落の研究——特に関東・中部地域における縄文集落の変遷とその構造について——』雄山閣
- 鈴木保彦 二〇一一『南関東における縄文集落の西と東——大型集落にみる集落構造の差異——』『縄文時代』二二、一—二八頁
- 鈴木保彦 二〇一四『晩氷期から後氷期における気候変動と縄文集落の盛衰』『縄文時代』二五、一—二八頁
- 鈴木三男 二〇一六『クリの木と縄文人』同成社
- 谷口康浩 一九九八『土偶型式の系統と土器様式——勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係——』『土偶研究の地平——土偶とその情報』研究論集二—三三九—三七〇頁、勉誠社
- 谷口康浩 二〇〇四『堅穴住居型式の分析からみた三内丸山遺跡の空間構成と変遷』『特別史跡三内丸山遺跡年報七』四九—五三頁、青森県教育委員会
- 谷口康浩 二〇〇五『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 谷口康浩 二〇〇七『縄文時代の社会——分節的部族社会から階層化社会へ——』『季刊考古学』九八、二七—三二頁
- 谷口康浩 二〇〇九『縄文時代の生活空間——集落論』から

- 『景観の考古学』へー』『縄文時代の考古学Ⅷ』三二―四頁、同成社
- 谷口康浩 二〇一―『縄文時代の竪穴家屋にみる空間分節とシンボリズム』『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』二、三七―四七頁
- 谷口康浩 二〇二―『縄文人の石神―行為』と『コンテクスト』による大形石棒の研究法―』『縄文人の石神―大形石棒にみる祭儀行為―』一―二五頁、六一書房
- 谷口康浩 二〇一五『大形石棒の残され方―放棄時の状況と行為のパターン―』『考古学ジャーナル』六七八、三―七頁
- 谷口康浩 二〇一七 a 『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』同成社
- 谷口康浩 二〇一七 b 『柄鏡形敷石住居と再葬制の接点』『二世紀考古学の現在』二一―二二頁、六一書房
- 千野裕道 一九八三『縄文時代のクリと集落周辺植生』『研究論集Ⅱ』二五―四二頁、東京都埋蔵文化財センター
- 塚本師也 二〇一七『栃木県域における柄鏡形(敷石)住居の受容とその背景』『国史学』二二三号(本特集号所収)
- 勅使河原 彰 二〇一六『縄文時代史』新泉社
- 中島将太 二〇一五『大形石棒の出土状況―東京都光明院南遺跡を中心として―』『考古学ジャーナル』六七八、二三―二七頁
- 中村 大 二〇二二『GISによる分析―縄文時代の北東北―』『祭祀儀礼と景観の考古学』一三九―一五八頁、國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 大學生統文化リサーチセンター
- 中村耕作 二〇一七『縄文時代中期末葉から後期初頭柄鏡形住居床面の石棒・土器・屋内土坑―国立市緑川東遺跡SV1をめぐって―』『史峰』四五、一―八頁
- 中山誠二 二〇一〇『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社
- 藤森栄一 一九七〇『縄文農耕論』学生社
- 宮地直道 二〇〇七『過去一万一〇〇〇年間の富士火山の噴火史と噴出率、噴火規模の推移』『富士火山』七九―九五頁、山梨県環境科学研究所
- 村田文夫 一九七五『柄鏡形住居址考』『古代文化』二七(一)一、一―三三頁
- 村田文夫 二〇〇六『縄文のムラと住まい』慶友社
- 村田文夫 二〇一三『縄文ムラの広場に建つ柄鏡形敷石遺構を復元する―東京都小田野遺跡SI08・SI10遺構―』『関東の古代遺跡逍遙』二四―四二頁、六一書房
- 本橋恵美子 一九八八『縄文時代における柄鏡形住居址の研究―その発生と伝播をめぐって―』『信濃』四〇(八)、三二―四四頁、同四〇(九)、五二―六五頁
- 本橋恵美子 一九九五『縄文時代の柄鏡形敷石住居の発生に

- ついで『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』六、四一—六八頁
- 山梨文化財研究所編 二〇二二『上中丸遺跡(第二次)』富士吉田市教育委員会・山梨文化財研究所
- 山本暉久 一九七六「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』二八(二)、一—三七頁、同二八(三)、一—二九頁
- 山本暉久 一九九六・一九九七「柄鏡形(敷石)住居と埋葬祭祀」『神奈川考古』三三二、一三三—一五二頁、同三三、四九—八三頁
- 山本暉久 一九九八「柄鏡形(敷石)住居と廃屋儀礼—環磔方形配石と周堤磔—」『列島の考古学』三三五—三五二頁、渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 山本暉久 一九九九「遺構研究 敷石住居址」『縄文時代文化研究の一〇〇年』第三分冊、一一三—一三〇頁、縄文時代文化研究会
- 山本暉久 二〇〇〇「外縁部の柄鏡形(敷石)住居」『縄文時代』一一、一—四〇頁
- 山本暉久 二〇〇二『敷石住居址の研究』六一書房
- 山本暉久 二〇〇四「柄鏡形(敷石)住居址をめぐる最近の研究動向について」『縄文時代』一五、一九三—二一六頁
- 山本暉久 二〇〇五「縄文時代階層化社会論の行方」『縄文時代』一六、一一一—一四二頁
- 山本暉久 二〇〇六「浄火された石棒」『神奈川考古』四二、三七—六五頁
- 山本暉久 二〇一〇『柄鏡形(敷石)住居と縄文社会』六一書房
- 山本暉久 二〇二六「縄文後・晚期社会論—住居・集落・社会の複雑化—」『神奈川考古』五二、八三—九四頁
- 山本暉久 二〇二七「柄鏡形(敷石)住居址研究をめぐる近年の動向について」『国史学』二二三号(本特集号所収)
- 山本典幸 二〇一六「縄文時代中期終末から後期初頭の柄鏡形敷石住居址のライフサイクル」『古代』一三八、二〇七—二二八頁
- 渡辺 誠 一九六八「埋葬考」『信濃』二〇(四)、三三—三六頁